

會名變更と改題を中心にして

倉 橋 惣 三

私が當時の「婦人と子ども」に寄稿し、ついで編輯を引受けるようになったのも随分古いことであつた。そして、相當力をも盡し、時とするに一冊の雑誌を殆んど全部自分で書くといふやうなことも一度ならずあつた。但し、之れは、編輯者として原稿を集める努力が足りないで、机の上で其の埋め草を書いた譯で、勉強といふよりも寧ろ不精の罰であつたのであるから決して自慢にはならないが、兎に角く、お蔭で、幼稚園教育に關する筆の仕事は多少させて貰ふことが出来たのであつた。先年小著「幼稚園雜草」を出版するに當て附屬幼稚園の方々が親切にも此雜誌から清書して

下さつた分量は可なりかさ高いもので、折角くのお骨折りを無駄にして濟まないと思ひつゝ、其の一部分しか版にしなかつた程であるが、それにしても、一つの雑誌に、よくも斯う澤山の分量を書かせて貰つたものだと、其の時自分でも呆れた位であつた。その分量だけ多い執筆が、讀者の爲に何の役に立つたとも思はないけれども、自分の爲に、いゝ稽古臺になつたことは、深く感謝して居るところである。

そんな譯で、其の頃は、此の會と雑誌とを、まるで自分のものでもあるかのような親身の氣で一切をやつてゐたのであるが、そうなると熱心の餘

いろいろのこと考へ出すもので、會の名と、雑誌の名とについて、何だか更新の必要があるように思ひ出したのであつた。それも變更の爲の變更といふような氣まぐれではなかつたと今でも信じてゐるが、何しろ、會と雑誌の名が始めて定められた時とは時代も移つて來てゐるので、そんなことが自然私の心に起つたものと思ふ。殊に、其の頃は私もまだ若かつたし、一體我國の幼稚園教育が、いつまでもフレibelの名を本尊として行はれなくてもよからう。フレibelは歴史的に幼稚園の創始者として永く尊敬しなければならぬ。しかし、今日の世界の幼稚園は、従つて我國の幼稚園も、現代の教育精神と教育原理によつて行はれてゐるもので、フレibelによつて行はれてゐるものではない。今日の幼稚園はどこまでも我等の幼稚園である。といふやうな氣持ちに力味かへつてゐたもので、今日でも勿論同じ考へでゐる

が)——だからフレibel會の會名を變へなければならぬといふ狭い理窟の筋合になると定つたものではなかつたかも知れないが、少くとも、日本の幼稚園の協會といふものが無ければならぬとは強く思ひ立つて居たのであつた。それで、若し私にもつと大きい力があるならば、此の光輝ある古い歴史をもつラレibel會の名は其のまゝ存續させて、別に、新たに一つの幼稚園協會を創立したらといふ風のことゝも、切實に考へもし、また人にも意見をきいて見たりした。しかも、その事情と、私の微力とが、そういふことを六かしいと思はせ、又そんなことをして、萬一フレibel會の名だけ存して實を空しくするようなことがあつては、義理に即して却つて忠實を缺く恐れもあるといふようなことを考へたりして、新協會創立をやめて、會名を變更することに私の心だけの問題として考へたのであつた。私は、どちらかといへ

ば、古きを捨て難い、一種尙古型のところのある性質で、改革とか、更新とかいふ威勢のいゝことは向かない方であり、今でさへ、あの時、フレール會の名を存して置いた方が、矢張りよかつたのかしらと、思ひ切り悪く思ひ出すことがあり、現に、ロンドンのフレール會を訪問した時など、ひとり何だか胸さわぎを感じて、日本にも嘗てはフレール會があつたが……と後は口の中でもぐぐぐ、誰れにといふことのない言ひ譯けめかしい言葉をいつたりした様の人間で、あの當時、そう自分の心を決めるまでには、どんなに心の中で悩んだものか知れない。

雜誌の名に就ては、これよりも簡単な問題で、會が機關誌の名稱を變へることは世間にも珍らしくない。それに、「婦人と子ども」といふ名稱が、我國の幼稚園教育の發展と充實を使命とし、職分とする雜誌として、聊か漠然に過ぎ、明確なる標識

を缺くことは、當時何人も氣がついて居たことであつたのである。殊に、之れも若かつた私だけの考へとしては、一體（若い時は誰れでもよく直きに一體をいふものです）「婦人」と「子ども」を一つ並にいつしよにするのはよろしくない。おん、なごどもといふ我國在來の舊い言葉には、婦人をも、子どもをも輕侮したような怪しからぬ見方がある。子どもの爲を思ふのは、婦人の大事な天分ではあるが、決して婦人に限つたことではない。どうも、此の名稱「婦人と子ども」のまゝでは、幼稚園の問題に大いさと、重さとを聯想することが出來難い。もつと堂々でなくとも幼稚園教育の雜誌として、端的明瞭に其の使命を表示する名稱にしなければならぬと考へたのである。詰り、從來のやゝ通俗的な名稱から専門的教育雜誌にしなければならぬと、之れは會名變更の問題よりも前からひとりで力味かへつてゐたことであつた。

自分の心の中ではそう考へても、會として重大な問題であり、第一、會長、主幹の意見を俟たなければならぬ。當時主幹は安井哲子女史で、別に反對もせられなかつたが、當時の會長中川謙次郎氏は、もう少し考へてといふ御意見であつた。

フレーベル會なり、「婦人と子ども」なりの創めから間接直接いろ／＼の御關係が深かつた上に、其の慎重な御性格からは極めて無理からぬこと、思つたので、其の時は其のまゝにして、從來のまゝで會の活動なり、雜誌の内容なり益々充實發展させることにつとめた。ところが其の後、私が主幹

となり、よかれ悪しかれ、責任を正面に負ふことが出来るやうになつたので、悪かつたら一切自分で責を負ふといふ心で、當時の會長湯原元一氏に總ての意見を申し出た。會長としては、それが會の爲に實質的に多少ともよいことであり、又會員諸君に於て異議がないならば、實行してもよから

うといふも話であつたので、更に幹事諸君（それは會長に謀る前に寄々相談してあつたが）と協議し、大正七年十二月十四日臨時總會を開いて、此の事を議題とし、満場異議なく可決せられた次第であつた。押し迫つた十二月に臨時總會を開いたのは、愈々實行するとなれば年の中途でなく、一月號からした方がいゝといふ爲であり、而して翌大正八年一月から會名を日本幼稚園協會と更め、同時に雜誌の名を「幼児教育」と更め、爾來今日に至つてゐるのである。

前にも申しした通り、此の變更は、吳々も、徒に新らしきを好む、變更の爲の變更ではなかつた。我國の幼稚園教育の發展を通觀して、その中心活動の一機關としての本會の職責を名實共に一層意義あらしめようといふ心願からであつた。尙ほ又、當時、私の一つの希望であつたところの、萬國幼稚園協會への加入の爲には、我が國を其の名に於

て、代表する協會として置いた方がいゝといふ考へもあつたのであつた。之れは、今日未だ實現せられてゐないが、其の機會の來た時に、日本幼稚園協會の名は都合がいゝと思つて居るのである。

雜誌の方に就ては、其の主眼目を幼稚園におくことは勿論であるけれども、敢て幼稚園のみに限らず、社會事業の方面でも、社會教育の方面でも、家庭教育の方面では勿論、要するに、幼兒期教育の全方面に向つて、其の問題を含有させる必要があるを信じて、特に幼稚園雜誌とせず、幼兒教育といふ廣い名稱を撰んだ譯であつた。

但し、此の改稱がよかつたかどうかは、いろいろの違つた感じもあることと思ひ得る。殊に、我國幼稚園教育の始期に當つて、よく其の指導者たる任務をつくし、貢獻するところ大なりしゆいし、よある名稱に對して、その存在をつゞけさせなかつたことは、今でも遺憾の感がないではない。

勿論、其の時の心は全く上述の通りであつて、先人の志を尊重し、本會の古き歴史的光輝を益々高揚させる爲に他ならなかつたので、其の點は今にして何等の悔も思はないが、古きを偲ぶ心に於ては、誰でも惜しい感じを去ることは出来ないのである。殊に、幼稚園創始者としてのフレイベルの名を記念する會が其の爲に我國に無いことになつた點は、其の意味に於て頗る惜しい。私がフレイベルの名稱變更を主唱したからといつて、フレイベル其人に對する史的敬意をもたないといふ譯では決してなく、それは、今此の文を草しつゝある私の書齋に、現にフレイベルの肖像を掲げてあることでも分つて貰へると信ずるのであるが、たゞ、當時の（而して今日も同じく）私の心は、そうした懐古の心よりも、現在と將來との我國の幼兒教育のことで一杯であつたといつてである。

々と變化させて愉快さうに一人で靜に私の傍にゐるのも忘れて遊んでゐる。決して一人で遊べなかつたこの子、人に頼らなければ遊びを見出す事の出来なかつたこの子、いつもくちよこくと、おちつきのないこの子に、こんな性質があつたのかと本當にうれしかつた。靜かな、しづかな環境は非常に必要だと思つた。深く考へさせられた日だ。

× × ×

朝早く近くの原に野の花を取りにゆく、まだあたりはほの暗く朝露はしつとりと、地上にうるほいを與へてゐる。甘草の花や名も知らない花が露をふくんで優しくつゝましく、ほゝゑんでゐる。この優しさ、この氣高さ、踏まれても踏まれても咲き出づる強さ！ あゝ私もこのやうでありた

さ！

(五〇頁よりつゞく)

その頃は若かつたしと私は言つたが、今でもまだ、自分の昔話をする程に老いてはゐない筈である。しかも、こんな話を長々と書いたのは、三十年記念號といふ目出度い本誌上に於て、本會と本誌との光榮ある舊名稱を今更に追憶し、その舊名に對しては敢て自ら忍ぶべからざるを忍んだ當時の私の心持を叙して、更めて舊名稱にゆるしを乞はんとするのである。

